

人文研紀要

第104号～第106号（2023年）

◆第104号—2023年(2023年9月発行 A5版336頁)

カズオ・イシグロ『充たされざる者』 ——語りの歪みの考察（2）	安藤 和弘
中世盛期ブリュッセル地域の修道院所領 ——ラ・カンブル修道院13世紀前半文書の分析——	舟橋 倫子
「チェルノブイリのあと」のおとぎ話 ——ジャン＝クロード・ビエット『カルパチアの茸』におけるカタストロフと歴史——	新田 孝行
19世紀シェイクスピア編纂本（1） ——ケンブリッジ版シェイクスピア全集（1863-6年）編纂の核心にあるもの——	金子 雄司
大分県佐伯市神ノ原遺跡の炭素14年代測定	遠部 慎
東京都下宅部遺跡出土土器付着物の炭素14年代測定研究 ——関東地方縄紋時代後・晩期の実年代——	小林 謙一
消散するカタチ ——アーネスト・ヘミングウェイ「キリマンジャロの雪」への 宗教的読解と詩学の宛先——	河田 英介
“We will go on and on and on and on” ——レイモンド・カーヴァーの「足もとに流れる深い川」再考——	中野 学而
第一次世界大戦勃発と革新主義の平和主義者たち ——国際女性平和運動におけるアメリカの女性たちのリーダーシップ——	一政（野村）史織
井筒俊彦における「存在＝意味」の哲学 ——『意識の形而上学』を〈鏡〉として——	小嶋 洋介
領事の手紙を読む（II）	野呂 正
専門分野の学びに向けたドイツ語の分析的読み ——KH Coderを用いて学生の気づきを探る——	西出 佳詩子 林 明子

◆第105号—2023年(2023年9月発行 A5版383頁)

ホイットィア70歳祝賀スピーチ事件をどう見るか ——『マーク・トウェイン自伝』における著者晩年の批評精神——	井川 眞砂
メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐる(II)	福士 久夫
1960年代におけるアフリカ系アメリカ人と星条旗	山城 雅江
ギョーザの来た道 ——あわせて1940年代以前の中国東北／旧満洲の言語状況について——	遠藤 雅裕
中華人民共和国重慶市及び四川省における方言番組をめぐる政策について(1)	小田 格
「精神汚染一掃キャンペーン」時期の音楽批評 ——「何日君再来」の再評価をめぐる——	孫 小童
伝統文化における中国絵画の美 ——茶掛の宋元画を中心に——	彭 浩
魯迅の文体と写真的感性(5) ——解剖学的まなざしとX線的まなざし(1)——	山本 明
『墓の彼方からの回想』と『赤い手帖』 ——シャトーブリアンの回想録におけるシャトーブリアン夫人の回想録の利用——	小野 潮
ステレオタイプ、キャラクター、アレゴリーの結節点 ——Ben Jonson研究から見えること	米谷 郁子
トライチュケ対モムゼン ——ベルリン反ユダヤ主義論争3——	平山 令二
スマートフォンを活用した効果的な学習について	大浜 陽子

◆第106号—2023年(2023年9月発行 A5版390頁)

La classification de la philosophie et la géométrie d'Euclide au début du XVIe siècle : le cas de Bartolomeo Zamberti (1473-1539)	Miho KOIKE
Building a Center of Pilgrimage: St. Elisabethkirche in Marburg and Indulgence in the Thirteenth Century	Asami MIURA
ソシュールとレヴィ＝ストロース, ジークフリートとオイディプース	金澤 忠信
16世紀日本の殉教 ——海外の視点から——	相田 淑子
創造性と内発的動機づけ	二宮 理佳
クレルヴォー修道院の祭壇と聖遺物	北館 佳史
崇禎一二年の制勅房生成勅書における文武官任用について	荷見 守義
上杉定勝『見聞書』の紹介と検討 ——近世大名の写本に関する事例的検討——	池野 理
『台記』保延二年記写本に関する一考察 ——烏丸本・狩野本・広幡本・日野本の写本系統——	白根 靖大
中世武家文書の収蔵状況と写本作成 ——市河文書を対象に——	西川 広平
藤野千夜『夏の約束』を「クィア」で読む	黒岩 裕市
パウル・ツェラン ——「ゴル事件」と精神病の発病	北 彰